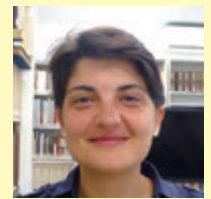


コラム 招聘研究員レポート

名前	所属	招聘期間
ロミーナ バルトッチ	フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センター	2019年 9月23日～2019年10月13日
劉 珊瑚	北京師範大学 文学院 民間文学研究所	2019年11月21日～2019年12月10日
デボラ フェルナンデス タバレス	サンパウロ大学 日本文化研究所	2020年 1月 8日～2020年 1月29日
姚 瓊	浙江工商大学 東亜研究院	2020年 1月 7日～2020年 1月21日
任 仁宰	漢陽大学校 東アジア文化研究所	2020年 1月13日～2020年 2月 2日

## 八角墳の建築構造と8という数字の持つ意味について

ロミーナ・バルトッチ  
(フランス国立高等研究院)



私の論文研究テーマは、八角墳の建築構造と、8という数字の持つ意味に的を合わせています。

八角墳は6世紀の終わりから日本に出現し、7世紀を通じて(古墳時代の終わりまで)建てられました。この葬送のモニュメントは、この時代の日本の建物としては珍しい幾何学的な形をしています。

本研究では、考古学と建築の両方の観点から八角形の墓を理解するとともに、古代日本の政治的および社会的文化的文脈にそれらに関連付けようと試みています。私の研究のねらいは、八角形の計画の発展が政治システムの変化によるものなのか、それとも仏教の導入に伴う伝統的な葬儀儀礼の変化に起因するのかを判断することです。

非文字資料研究センター滞在中、知識を増やすことに努めました。したがって、このスタイルの葬儀構造とその背後にある衝動の発展について、政治的、文化的、宗教的な解釈を提供したいと考えています。

研究プランは三つの部分で構成されています。一つ目は、八角墳が出現する6世紀と7世紀の歴史的文脈における建築構造の研究。二つ目は、歴史的建築的アプローチにより八角形の使用を定義するための、八角形古墳計画の意味の研究。三つ目は、その時代の社会政治的および文化的文脈における古墳とその位置の象徴的な分析です。これら3点をより深められるよう3週間の滞在計画を練りました。

そして、神奈川大学非文字資料研究センターでの研究滞在スケジュールとして、滞在の最初の週は図書館での調査と文献収集、博物館訪問、相談を行うことに専念しました。これらの活動を、主に神奈川大学非文字資料研究センターと東京エリアの他の機関にて行いました。2週目と3週目には、八角墳が発達した背景をより理解

するために、八角墳の発掘に取り組んだ考古学者に会うため、電車で日本国内を旅しました。さまざまな先生がたとのインタビューは、古代倭国と大陸との間の朝鮮の影響と政治的関係のテーマにまで及びました。

- 1) 歴史や考古学に関する日本の博物館における文献調査
  - 神奈川大学図書館 (神奈川県横浜市、六角橋)
  - 東京国立博物館の研究情報センター (東京都台東区上野公園)
  - 東京芸術大学図書館 (東京都台東区上野公園)
  - 京都大学中央図書館 (京都府、吉田本町)
  - 京都大学考古学研究室 (京都府、吉田本町)
  - 奈良県立橿原考古学研究所図書館 (奈良県橿原市畝傍町)
  - 奈良県文化財研究所図書館 (奈良県奈良市二条町)
  - 京都市考古資料館 (京都府、上京区、松陰町)
  - 大阪府立近つ飛鳥博物館図書館 (大阪府、河南町東山)

- 2) 八角墳の歴史の時期についてさらに学ぶために訪れた日本の博物館
  - 國學院大學博物館 (東京都渋谷区)
  - 東京芸術大学



写真1 岩屋山古墳



写真2 天武天皇・持統天皇榿隈大内陵

- 美術館（東京都台東区上野公園）
- 東京国立博物館の考古学ギャラリー（東京都台東区上野公園）
- 京都市考古資料館（京都府、上京区）
- 京都大学総合博物館（京都府、吉田本町）
- 国営飛鳥歴史公園館「キトラ古墳壁画体験館 四神の館」（奈良県）
- 奈良県立橿原考古学研究所での考古学展示（奈良県橿原市畝傍町）

- 3) 発掘物および考古公園への訪問
- 国営飛鳥歴史公園（奈良県）
- 平城宮跡（奈良県）

- 京都市北部にある墓

- 4) 考古学者との面談および面会

- 吉井秀夫先生
- 高橋知奈津先生
- 辰巳俊輔先生
- 東影悠先生
- 鈴木靖民先生

議論を始めるた

め、さらには日本の考古学的研究方法論を学ぶために、質問を用意しました。各考古学者の答えは必ずしも同じではなく、また全ての質問に答えられるわけではないというのも興味深いことでした。このことは八角墳のトピックが現在進行形であり常に進化していることを表しています。



写真3 天武天皇・持統天皇榿隈大内陵

## 神奈川大学訪問記



劉 珊珊  
(北京師範大学)

2019年11月20日、東京・羽田空港に着き、電車とタクシーを乗り継いで、現代日本の民俗学研究の中核である神奈川大学に到着した。神奈川大学(略称は神大)は、1928年に、東京にほど近い横浜市に設立された商科学校の横浜学院を前身として、1949年の学制改革で新制大学に生まれ変わった日本でも有名な私立大学である。神奈川大学には日本の民俗学研究の重要な機関である日本常民文化研究所が設けられ、付置機関の非文字資料研究センターが発行する『非文字資料研究』は民俗学研究の重要な刊行物である。国際交流の面では、神大民俗学系の各機関も毎年、交換留学、研究連携などの形で、北京師範大学、華東師範大学、中山大学、台湾の国立大学及び韓国、欧米の有名大学などと提携している。学術交流協定を結んでいる北京師範大学民俗学専門の博士課程在学学生である私は、幸運にもこの訪学の機会に恵まれた。

日本に到着した翌日、今回の指導教員である小熊誠先生にお会いした。先生は神奈川大学非文字資料研究センター長を務められ博士課程で教鞭を執られており、国

際民俗学会連合会発起人メンバーの一人でもある。また、日本民俗学会の元会長であり、日中比較民俗学、沖縄文化、風水文化などを研究されている。小熊先生は背が高く、黒縁のメガネをかけていて、その厚いレンズ越しにも知恵と厳しさが垣間見えた。また、先生の短い髪からもとてもエネルギーな印象を受けた。私の研究が客家文化に焦点を当てたもので、日本の「本家」と「分家」について興味があると伝えたところ、小熊先生は聞き取り調査先に積極的に連絡を取り、六角橋の山室家に連れて行ってくださった。私自身、日本の文化やマナー、特に言葉についての知識が不足していたため、3時間の聞き取りでは少し遠慮してしまい、振る舞いに自信が持てなかった。小熊先生は、私に寛容で、聞き取りを引き受けてくださり、おかげで私は、山室家の歴史や「本家」と「分家」との関係、年中行事について、初歩的なことを理解することができた。

神奈川大学の日本常民文化研究所の所長である佐野賢治教授は、日本の有名な民俗学者の一人で、文化庁文化財専門委員、日本学術会議連携会員など多くの職務を